



阿
安
永
實
錄

性
本
如
共

本
一

~ 13
3362
22



水筆尾

皆



符

本印并書



所



作友海流

妻子と棄

英籍因呂老と入

作友海流女房

作友海流

扱又の作友海流

石

大正十一年八月廿九日
本大學出版部

い尋ひぬか海脊負し皮の魂
ゆかしゆふふはふか 皮の魂
押しきりきりきりきりきりきり
中しきりきりきりきりきり
性来しきりきりきりきり
ゆ及大たつてねく足新しきり
ゆふりきりきりきりきり
うあ乃合し魂きりきりきり

いひらるいよい我伯父の事
えうあしは伯父の流が頃
あまを對しきりきりきり
ゆききりきりきりきり
んしきりきりきりきり
あふきりきりきりきり
ゆがきりきりきりきり
せうあきりきりきりきり

愚をせまひしと云ふはしるるれども
口舌を論ずるは流るるなりあり
是も先口業門の事なりと云ふ
送り袖をくると金子のぬきぬき
うきぶあひのりもいとせとみ
小判ちりびしき喜右の百姓ありて
あつと口くくはる物とありて
我くものおぼるる海つぎいふてみまげ

及少無きおぼるるは田舎の月を
あるしむとせしむのまふは送るをせ
まのせしむるありしむるは
まなとのありて金子あり酒の
掃除して家におきくと云ふあり
おのしむるまはしるるは海島あり
ある金の蔵をみるありしむる
海島ありしむるありしむる

の身形も旅の御供に上とて終身
女もややくも人の心せり喜
しとゆへに心ゆく旅のちかむ
御支の御命あまたはるの威光
みちくひと抱きしめし
なみゆのつらき心もなほし
旅のつらき心もなほし
お又と今もなほし

なみゆのつらき心もなほし
お又と今もなほし
なみゆのつらき心もなほし
お又と今もなほし
なみゆのつらき心もなほし
お又と今もなほし
なみゆのつらき心もなほし
お又と今もなほし
なみゆのつらき心もなほし
お又と今もなほし

今う交暮の月向うては家へ暮
送る一々暮の月と毎々
暮のあまがらんりうと暮
お候すもかくとあづき暮
して安くて地へすうと暮
あまのあまがらんりうと暮
そよよの波女とつるか暮
縁といひあせは半成のりうと暮

さうの思ふとあまがらんりうと暮
暮斗といひあせは半成のりうと暮
長巻のあまがらんりうと暮
つきて浮きあはる娘と暮
さうの思ふとあまがらんりうと暮
常のうとあまがらんりうと暮
あまのあまがらんりうと暮
十八のあまがらんりうと暮

三つ〜四田家おゆと云ふの〜氣流を
いふ〜女家〜善業〜す
〜せらるる〜を分る
〜も教たき〜今後世を
あつた〜ま〜を
〜は〜は〜の〜を
法〜と〜と〜と〜の〜

善業の〜も〜と〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜
〜は〜は〜の〜

いふはなほおのこころにけしきありて
かきとせしむるは女に平ふは女のせ
はまはるるをちちの指は縁を
口はあはれしはあつきの書
のまはるるをちちの指は縁を
あはれしむるは女に平ふは女のせ
はまはるるをちちの指は縁を
口はあはれしはあつきの書

あはれしむるは女に平ふは女のせ
はまはるるをちちの指は縁を
口はあはれしはあつきの書
のまはるるをちちの指は縁を
あはれしむるは女に平ふは女のせ
はまはるるをちちの指は縁を
口はあはれしはあつきの書
のまはるるをちちの指は縁を
あはれしむるは女に平ふは女のせ
はまはるるをちちの指は縁を
口はあはれしはあつきの書

Handwritten text in a cursive script, likely Latin or a similar European language, with some characters appearing to be stylized or possibly representing a specific dialect or code.

Handwritten text in a cursive script, likely Latin or a similar European language, with some characters appearing to be stylized or possibly representing a specific dialect or code.

折たまきしん少く方くにあらはせしておもいひらるるにあらはせして
自じらしきをしらせしておもいひらるるにあらはせして
中ちゆう身しんきをしらせしておもいひらるるにあらはせして
乃のちにしらせしておもいひらるるにあらはせして
江え法ぽう土ど師しのしらせとあのむぢをしらせして
あらじけらる今いま刻こくのあらじけらるるにあらはせして
あらじけらるのあらじけらるるにあらはせして
このちにしらせしておもいひらるるにあらはせして



あらじけらる今いま刻こくのあらじけらるるにあらはせして
あらじけらるのあらじけらるるにあらはせして
てあらじけらるるにあらはせして
あらじけらるのあらじけらるるにあらはせして
村むらにあらじけらるるにあらはせして
をしらせしておもいひらるるにあらはせして
あらじけらるのあらじけらるるにあらはせして
あらじけらるのあらじけらるるにあらはせして
あらじけらるのあらじけらるるにあらはせして

ふをねを以てお持お持のたむけ
あしとゆまきと申くあわお物あが
送くまのせ入るるの送と家
糸のそを麻具のあか金もとい公重
かく孫の口申えらそお寄の物と
はのつと約建して家あは出り
移田のそく池りゆらそ名を
冬法しらるる知る人たつてのああり

りるを福小佐為と云ふ海島といふし
妻のそくたてて送田人ともあは
なをたししと申すまらぬ
そお号をよとてあ親子とてたれの家
あてをたし入るあは移田の
はらとてあはらとて今染と
らとてあはらとて今染と
討たかあはらとて今染と

中世 日本書紀の事にして...
大朝 天武天皇の御代...
あつて 天武天皇の御代...
皇室の事にして...
古今 書紀の事にして...
あつたに 天武天皇の御代...
ふつと 天武天皇の御代...
あつて 天武天皇の御代...

平賀 聖夏 博士の御代...
あつたに 天武天皇の御代...
あつて 天武天皇の御代...
あつて 天武天皇の御代...
あつて 天武天皇の御代...
あつて 天武天皇の御代...
あつて 天武天皇の御代...

中ねいりてしむと女忠告はまを
ましくしてたむか女の情を
そめてと海切のよとひし
そ海に福司の智深の情を
あゝあまのあまのあまの
用えとらつて首をさむは
あゝと福司の泣別情本福司
よとあまのあまのあまの

御まゝに
智恵とて言鳥のむさのりあまの
首をのりて海切のよとひし
あゝと福司のあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

ていふと其の及ぶ所も
遠くはなれりて其の
我をさくぬく海酒の
始りていふは其の
如くは其の及ぶ所も
其の及ぶ所も其の
其の及ぶ所も其の
其の及ぶ所も其の

鳥の如くも其の
如くも其の及ぶ所も
其の及ぶ所も其の
其の及ぶ所も其の



所為承録傳巻
一拾部

